GOD EATER ～GOD SIDER’S MURMUR～

ふるうつ盆地

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ＧＯＤ　ＥＡＴＥＲ　～ＧＯＤ　ＳＩＤＥＲ，Ｓ　ＭＵＲＭＵＲ～

【Ｎコード】

Ｎ９６４４Ｊ

【作者名】

ふるうつ盆地

【あらすじ】

人類文明に喰らいつき、人々を絶望の渕に叩き込んだ生物、オラクル細胞。全てを破壊しつくす神、新たな地球再生を促す神として、「アラガミ」と呼ばれ恐れられている彼らは、一体何を思い文明を滅ぼしたのか。ＰＳＰゲーム『ＧＯＤ　ＥＡＴＥＲ』を、ゴッドサイドから検証。単にサリエルをヒロインにしたかっただけですが。

（前書き）

ＰＳＰゲーム『ＧＯＤ　ＥＡＴＥＲ』の二次創作小説です。登場キャラは完全オリジナルでネタバレは含みませんが、設定に大胆なアレンジを加えていますので、あくまで脳内設定ということで。

一体全体、捕喰という行為はどう理解されているのだろう。
捕喰、即ち、捕らえて、喰らう。
捕らえるとは、獲物の自由を奪うことだ。捕らえた時点では、まだその命は続いている。
では、喰らうときは？
大抵、その獲物は死ぬ。
一部のサメとマグロのように、サメが一部だけを食してマグロの傷が癒えるのを待つ、という関係もあるけれど、それは稀有なケースだろう。
つまり捕喰とは、自由を奪い、殺す行為だ。
人間の場合なら、殺してから食材に加工して、消費する、といったところか。
それが、動物だろうと植物だろうと変わらない。
米であろうがパンであろうが肉であろうがサラダであろうがコーンであろうが、ひょっとしてタブレットかもしれないけれど、九分九厘、人間は食すときに、口を用いる。
口、それは食物を噛み砕き、多数の酵素を含んだ唾液と混ぜ合わせる、消化のスタート地点だ。
切歯で噛み切り、犬歯で引き裂き、大小の臼歯で磨り潰すことで、食物をより、消化しやすい単位へ分割する。
およそこの時点で、どんなものでも口に入ってしまえば同じだろう。
それがどんなに凝った意匠で盛り付けられていても、喉の奥まで綺麗なままじゃ通らない。
そして程よい大きさまで細かくされた食物は、次なる消化のステップのために食道を通り抜けて胃へと進む。
胃は、最終的な消化のための準備工場だ。

塩酸と酵素からなる胃液で送り込まれた食物を殺菌し、蠕動運動を繰り返すことで食物をドロドロにしてしまう。

こうして程よく食物の構造を壊しておいて、本命の小腸の出番だ。

３メートルという長さを誇る小腸は、通り抜ける食物を無数のヒダで包み込み、そこから栄養素を選んで吸収していく。内壁には血管とリンパ管が隣接していて、有意な栄養素は血管を通って肝臓へ、稀に毒素はリンパ球に引っかかって除去される。

それだけでは終わらない。次なる舞台の肝臓は、栄養素を人体に有用な形状へ作り変える化学工場だ。

栄養素の分解と合成、アルコールなどの有害物質の解毒、そして血液成分の調整を行い、最終的に末端の細胞まで必要な栄養を行き渡らせ、過剰な栄養分は貯蔵しやすい形に加工して、必要に応じて分解、再利用を繰り返す。そういう複雑怪奇な、人間が機械で代用できない超器官のおかげで、人々は日々の暮らしを意識せずとも送れている。

以上のごとく、食すという行為は、結局食物の構造を破壊し、その食物を構成していた分子を取り込み、利用する一連のシステムだ。

人間は自分たちのことを、霊長の王と呼んで生態系の頂点に君臨していると勘違いしたようだけど、実際はそんな格好いいものじゃない。

ビタミン、という栄養素がある。

この定義は意外と知られていない。

本来肉体の維持に必要不可欠でありながら、人体では合成できない物質、それがビタミンだ。

例えばライオンなどの肉食動物。彼らはビタミンＣを体内で合成することで、草を食さなくても支障なく生きられる。

だというのに人間は、生まれた時から他の生物を多様に摂取しなくては、その肉体の維持すら出来ない不完全な生物だ。他の生物が合成したビタミンを、外部から摂取することで生きている、不自由な生物。単独では完結しない欠陥品。

そして、あらゆる物を破壊し、合成し、奇怪な物体へと合成する生物でもあり……全盛期、この惑星の気候機構すら変容せしめ……今はゆるやかに、けど確実に、その栄光を過去へと置き捨て、恐々と滅びを待ち続ける日を送っている。

さて、人間の話はこれくらいにして、今、ボクの手には欠片がある。

手の平にスッポリと収まるそれは、オラクル細胞と人間が呼んでいる、奇態な生物の結合体だ。

あらゆる物を吸収する単細胞生物、「考えて、喰らう細胞」。現在世界中に拡散していて、現状の生物とは根本から異なる『捕喰』に特化した特異な器官を細胞壁状に所持する、人類の天敵とすら言われている生物だ。

確かに、人間にとって、コレは脅威なのかも知れない。

なぜなら、コレらは分解するからだ。あらゆる物を？　いや、あらゆる人工物を。

オラクル細胞は、自然のものを不必要には食さない。いや、発生当初は手当たり次第という時期もあったようだけど、それはあくまで黎明期の話。

ある程度の進化を経て、いまやボクらは自分で自分を律して必要な進化を選べる、発展期へと差し掛かりつつある。

そして今、人工物を餌と見なして活動するボクらの消化活動は、食すという言葉では大げさすぎて、むしろ、人間でいうなら、食事のごく最終段階、肝臓のような活動なんだ。

吸収した物を、あるいは分子レベルに分解し、あるいは元あった形状に合成して、必要に応じて野に戻す。

それが、コレの正体。

コレの存在意義。

増えすぎた異物を、原野の姿へ戻すカミの意思の発現。

そう、ボクらは、カミガミの時代と呼ばれた過去の地球を取り戻す、ただそのために多分、ガイアから生み出された、器官に過ぎな

い。
と。
彼女の脚が、ボクの肩に触れる。
見上げればそこには、翠色に輝くすべすべしい美足がスックと天に伸びていて、何事かは知らねども何か大切なものが詰まっているであろう臀部へと吸い込まれている。さらにその上に眼をやれば、蝶のように広がる翼がスカートのように腰を覆い、人間の少女を模したと思われる上半身が、その美麗な膨らみかけを見事に彫刻されて在り、その頭部を彩る巨大な冠に、第三の瞳であるエナジーレイの射出口がなければ、美少女と見紛うほどの愛らしさ。
そんな彼女は人間ではなく、むしろ人間から『アラガミ』と呼ばれて忌み嫌われているオラクル結合体であり――その瞳が湛える光は、微笑や友愛などという温かさを超越した、熱烈な欲望を発露してギンギラギンにさりげあり。目に口ほどにモノ言わせ、彼女の心を捉えて離さぬ憎いアン畜生……それは残念ながらボクではなく、ボクの手の平に乗せられている、オラクル塊だ。
このまま１０秒も見詰め合っていたら、間違いなくボクは額から発せられるエナジーレイに焼き滅ぼされるに相違なく、ほんの少しの思索も許されぬ身をちょっと憂いながら、空にヒョイと、そのオラクル塊を放り上げた。
彼女――人間からはサリエル種と呼ばれている、その幼生体――は、人前で大口を開けて食事をするのを憚る恥ずかしがり屋さんだから、宙にあったそのオラクル塊は、その愛らしい右手から直に吸収されてアッと言う間に消えてしまい、再度、注がれ続く熱視線。
それもそのはず。
ボクはあえて描写しなかったけれど、いまだ乙女である彼女の肉体は、先の不幸な事故によって左腕と右脚が食い千切られており、ボクはそんな彼女の肉体を修復するために、今さっき一体の大型オラクル結合体を捕獲したばかりだったのだ。
暑い日差しに晒されて、ボクが座しているのは、機械仕掛けの巨

体。
人間の髑髏を正面に模したその巨体は、何を食べたのか機械を随所に露出している走る小山。人間たちからはクアドリガとか呼ばれているらしい、とにかく大食らいの浪費屋だ。
別にボクたちは、それがどれだけ大きかろうと、触れてしまえば諸共に、なんでもかんでも吸収してしまうのだけれど、面倒なことに彼女ときたらグルメなスウィートで、油まみれ火薬仕込みの人間の機械は舌が寄せ付けないときている。
そんなわけで仕方なく、ボクが間に入って、クアドリガの巨体からオラクル細胞だけを抽出して彼女に餌（と思った瞬間に睨まれたので便宜上『材料』としておく）を与える名誉ある役目を仰せつかっているわけで。
といっても、これがまた、身から出たサビ、藪をつついて出した蛇。
もともと彼女が襲われていた場面に、わざわざ出くわしたのが運のツキ。
ボクらの常識的には、そのまま彼女が捕喰されるを高見の見物、事が済んだ暁に、ハイエナよろしく残飯漁りっていうのが王道ではあるのだけれど、一方的に嬲るってやり方が気に入らないのがボクの性根で、よせばいいのについつい助けてしまったのが事の発端。
それから彼女の、失われた身体を取り戻したい執念はボクに一方的に向けられて、助けたはずが今度はボクが材料候補。
こんなボクでも一応大志ある身で、志半ばで吸収されるわけにはいかぬと、意に沿わぬも丁々発止の一上一下、虚々実々炎稲妻（ほのおなづま）水に月、そは花火の打ち上げかライブハウスかってくらいに派手な、オゾン臭い光線のやり取りが一時間ほど続いたりもしたけれど、最終的に一緒に材料を探そうという、一時休戦協定が無事結ばれての二人旅。
……それにしても、よく食べる娘である。
最初こそ、オウガテイルなどの中型のオラクル結合体を捕喰して

いたけれど、食べても食べても満足してくれないものだから、一念発起してクアドリガを捕らえてみたけど……これ、全部食べ尽くしちゃうんじゃないかな。

ボクらは、オラクル細胞の集合体だ。

個々で生物として完成していながら、集合することで1個体の各器官をも担いうるオラクル細胞は、しかし生物としては意外と脆弱なことに、自己増殖力が低い。

そんなわけで、ボクらが同族すら喰らうのは、その方が回復が早いというより、それ以外に有効な回復策がないため、だったりする。

だから、ボクらの絶対数は、決して増えすぎることがない。

成体となるまでに、彼女のように多数の同胞を喰らわなければならないから。

にしても、この娘は大食漢な方だと思うけど……肝心な部分が成長してないよね？

なぜか思いっきり頭を蹴られた。

思考を遮る術がないって、同族感応は時に迷惑に過ぎる。

とりあえず、クアドリガを分解して、彼女に材料を与える作業に集中しよう。

これが、思い切り面倒くさい。

いっそ、一度ボクが咀嚼した上で、オラクル塊だけ吐き出したほうがてっとり早いのかも知れないけど、なんていうか、それはその、口移しみたいで恥ずかしいよね。

……なんで君は、スカトロなんて物騒な単語を知っているかな？

まったく、姿だけかと思ったら、効率よりも見た目を気にするあたり、この娘は中身まで人間くさい。

ま、ボクはこういうチマチマした作業が嫌いじゃないから言いけどね。ついでに彼女が嫌いな機械を食べれば、自分の飢えも凌げるし。

そんなわけで、ボクは左手をナイフに、右手をフォークに形態変化して、クアドリガの解体を進めていく。

一口サイズに切り取って、ヨッと放ればにわかに空中で姿消し。
一口サイズに切り取って、ヒョイと投げればまたまたオラクル片は消え失せて。
まるで餅つきの合いの手のように、切って投げて食べられて、切って投げて食べられてとやっていりゃ、ホイと意地悪もしたくなる。
けれど破片に見せかけて投げ上げたキャタピラは、見事に見抜かれ見せしめに、こちらの頭上に打ち落とされる有様。
……君は本当にわがままだなぁ。
見上げれば、それでも勤労の甲斐あって、彼女の左腕は半ばまで生えようとしていて……髪の毛の成長速度があり得ないくらい早い気がするのは気のせいですかって、むしろ四肢の再生より髪型の追求に執念を燃やす時点で、オラクルとして何かが根本的に間違っている気もするんですが……あ、次寄越せですか、そうですか。
けど、気がついたらアッと言う間。見上げるほどの巨躯もいつしか平らげて、まぁ、半分くらいは機械そのままだったとは言え、残るオラクル成分はクアドリガのコアだけと相成ってしまったわけで。
ボクらが結合体として、あたかも一個の生命体のように振る舞える、その大前提がコア細胞の存在だ。
一体誰がどんな意図で生み出したのか、単体でも仕事をなし得るはずのオラクル細胞は、さらに目的に特化した器官となるべく、工場生産のごとき分業本能が組み込まれていて、その工場長とも言えるコア細胞は、その身に近接するオラクル細胞を、問答無用で支配できるという超王権を有している。
逆に言えば、コアさえ生き残っていれば、時間はかかるかもしれないけれど、いつかは元の姿を取り戻せるというわけで、他の同胞はともかく、ボクはコアだけは見逃す主義であるわけで。
ま、ここ最近は、そのコアを無差別に捕獲して、肉体に移植している人間もいるって話だけど……わざわざ自分から餌にならなくてもいいだろうにと、呆れて文句の一つも言ってあげたくなる。
自意識過剰な彼らは勘違いも甚だしく、ボクらが好き好んで人間

を食べていると思っているのだ。
とんでもない。
ボクに言わせれば、人間ほど不味いものはな……いや、生きた人間は食べたことないけれど、野に捨てられていた死体を味見して、もう二度と喰らうものかと心の奥底に誓って以来、触れるどころか近寄ることすら忌避している。
確かに過去、ボクらは細胞分裂のために、仕方なく人間の身体を補喰していた。なぜかオラクル細胞の増殖に、人間の肉を利用するのが効率が良いからだ。
けど、それ以上に、ボクらは大義名分を持っていた。
当時の人間が、べらぼうに多かったからだ。
８０億人にも達しようとしていた人間は、自身の生命維持のための食物すら不足し始めていて、大規模で無慈悲な間引きを行わない限り、他の動植物へも深刻な被害が波及しかねない状態だったからだ。
だから、ボクらの先人は、見境なく人間を喰い散らかした。
当時の人間が目指して声高に叫んでいた、持続可能な生態系にふさわしい人口に落ち着くまで、脇目も振らずに機械的なまでに、ボクらは効率を無視して人間たちを喰い荒らした。
無論、それが人間にとってはジェノサイド、許されざる大虐殺であったことは否定しない。
しかし、人間が減らない限り、その人間に食べられる動物たちもまた、日々絶滅の危機に見舞われ続けたのだから、まぁなんだ、簡単に言えば喰われる身にもなってみろって事で。
栄枯盛衰。生者必滅。驕れる者も久しからず、捨てる神あれば拾う神があるのが世の常で。
恐竜の絶滅は言うまでもなく、全球凍結といった超寒冷期には全生物が絶滅の危機に晒されたことすらあり、翻ってわずか１万年ほど前には、北極の氷が全融したほど暖かかったのが、この地球。
ま、なにが言いたいかって、もう、十分繁栄を謳歌したろ、人間？

登山したら下山するのが当たり前。
往く川の流れは絶えずして、しかし元の水にあらず。万物流転を悟っていながら、自分たちだけが例外ではいられないでしょ。
ま、別にボクらは、人間を根絶やしになんて考えていない。
ただホッソリヒッソリ静かに、種の存続だけを考えて日々を生きてくれればいいわけで。
……さて、そろそろ次に行こうか。
人間に利用されたりしたら業腹だから、可哀想なクアドリガのコアには、そのうちオウガテイルでも食べさせてあげることにして。
……君は本当に、治りたいわけ？
クアドリガを半分平らげておきながら、ほとんど体積が増えていない彼女を見上げれば、質問への答えが是か否か、彼女は蝶の羽根のようにスカートを広げてクルリ、小気味いいステップを宙に描いて先に泳いでボクを促す。
……君、飛ぶだけでオラクル消費するんだからさ、今くらいは歩こうよ。
そんな呟きも、天駆ける少女には届かずに。
今日も明日も燦々と、お天道様は相変わらず愛注ぎ。
今日も明日も淡々と、大地は巡り、あらゆる分子は輪廻する。
同胞を無に帰す使命を胸に秘め、明日も明後日も粛々と、ボクは人工物を自然へと還して歩いていこう。
神の見えざる手が、新しい時代の均衡点に至るまで、ボクの出番はまだまだまだ、遙かに遠くオラクルの、繁栄を極めて斜陽を迎え、きっと避けれぬ黄昏の、鐘の音高らか鳴り響き、すべてを幕引くボクの指が、滅びの引金に指かける、その時までは、ね……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9644j/

ＧＯＤ　ＥＡＴＥＲ　～ＧＯＤ　ＳＩＤＥＲ’Ｓ　ＭＵＲＭＵＲ～

2010年10月8日15時24分発行